日本語母語話者教師が考えるナラティブ作文の Good Writing

── 評価の際に重視された項目より ──

Good Writing in Narrative Writing Evaluated by Native Japanese Language Teachers

── Evaluation Criteria Regarded as Important ──

数野恵理・影山陽子・トンプソン美恵子・坪根由香里
KAZUNO Eri, KAGEYAMA Yoko, THOMPSON Mieko, TSUBONE Yukari

〔要旨〕
本稿は日本語学習者の書いたナラティブ作文を評価する上で日本語教師が重視する観点、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文の特徴を明らかにするものである。分析の結果、評価の観点として、内容、構成、日本語の中では内容が最も重視されており、その中でも、メインポイントが明確であること、課題に沿っていること、主題と出来事の間に一貫性があることが最低限求められることが明らかになった。さらに、good writing と評価されるには、出来事とその出来事に対する心情・評価が具体的に述べられていること、日本語の正確さに大きな問題がないということも求められる。これらを満たし、さらに興味深さがあり日本語が非常に正確な作文は特に優れたナラティブ作文とみなされることが示唆された。

Key word: ナラティブ作文、作文評価、評価項目、good writing、日本語教師

1. はじめに

筆者らは、第二言語としての日本語のナラティブ作文の good writing を探り、これまで開発されてこなかったナラティブ作文の評価項目、評価基準、ルーブリック、フローチャートを開発することを目指している。その第一段階として、坪根他（2021）、影山他（2021）では、日本語の論証型作文と英語のナラティブ作文の評価項目、ナラティブ・ディスコースの構成要素を参考にナラティブ作文の評価項目の素案を作成し、日本人大学生が書いたナラティブ作文を対象として、good writing について探った。それに続くものとして、本稿では、日本語学習者が書いたナラティブ作文を対象とし、日本の大学で留学生の作文指導をしている母語話者日本語教師による評価観点を調査し、ナラティブ作文の good writing の特徴 について探ることとした。

なお、「ナラティブ」とは「一連の出来事を時間軸に沿って展開する文章」（田中・阿部、2014：38）であるが、「ナラティブ」には、ある問題意識から対処、解決に至るまでの展開が求められるものもあり、時間的経過・順序が示すものには幅があると考える。

本稿の研究目的は以下の通りである。

（1）日本の大学で教える母語話者日本語教師がどのような観点から日本語学習者のナラティブ作文を評価するのか、またその中でどのような観点を重視するのかを明らかにする。

（2）ナラティブ作文の good writing とそうでない作文にはそれぞれどのような特徴があるのかを明らかにする。

2. 先行研究

ナラティブ作文は、日本語教育においては「夏の思い出」「忘れられない出来事」など、初級から中級にかけて扱われることが多いが、日本語学習者に限らず、日本語母語話者の大学生もナラティブ作文を書くことが求められている。大学の初年次教育でのライティング課題の種類を調査した菅谷（2018）によれば、論証型レポートだけでなく、自身の経験や学習を振り返る省察レポートも複数の科目で確認されたという。安藤（2018）も、大学で身に付けるべき「書く力」には、就職活動のエントリーシート等を書く力も含まれ、自身の体験を書くことが求められる場合も多いと指摘する。また、ライフストーリーを扱う授業実践が、留学生対象（尾関、2017）、留学生と日本人学生の共修（佐藤、2019）ともに行われており、ライフストーリーを語る、聞く、理解する、文章に表すことが、留学生にも日本人学生にも求められている。

このように大学において日本語学習者も日本語母語話者もナラティブ作文を書く必要性があるにもかかわらず、ナラティブ作文の評価に関する研究はまだ少なく、作文評価の研究は、基本的に論証型を中心に進められてきた。

論証型作文の研究には、評価基準の開発、評価者と評価観点の関係、good writing に関するもの等がある。評価基準の開発としては、ライティング評価へのルーブリックの活用の提案（脇

田、2018）やフローチャートを用いた総合的評価およびマルチプルトレイト評価の研究（田中他、2018）がある。評価者と評価観点の関係については方（2017）や伊集院他（2018）があるが、方（2017）によると、日本語学習者の作文を評価する際、中国語母語話者教師のほうが「日本語」に、日本語母語話者教師のほうが「内容」に注目していたという。また、大学教員によるライティング評価の観点を探った伊集院他（2018）によると、作文の評価が高いか低いか、書き手が日本語母語話者か学習者か、評価者が日本語教員か専門教員かにかかわらず、評価を決定づけた良い点と悪い点の記述は、「内容」「言語」「構成」「形式」の順に多いという共通点があったという。good writing に関しては、日本語小論文を日本語教師による評価、評価時のプロトコル、アンケート調査回答を用いて分析した田中・坪根（2011）があり、日本語教師は「課題の達成」「主張の明確さ」「内容のオリジナリティ」「客観的で広い視野からのサポート」「構成」「談話展開のテクニック」「表現力の豊かさ」等を good writing の順位決定要素として捉えるが、「課題の達成」「主張の明確さ」「客観的で広い視野からのサポート」「構成」の優先順位や重み付けは評価者間で異なっているという。

数は多くないもののナラティブ作文の評価に関する研究としては、藤原（2013）、坪根・影山（2020）、坪根他（2021）、影山他（2021）などがある。日本語学習者の物語作文の高評価群と低評価群の違いについて考察した藤原（2013）では、両群の「表記・語彙」「文法」に有意差は認められないものの、「事実の説明」「情景描写」「背景説明」は高評価群の方が低評価群よりも有意に高かったという。坪根・影山（2020）はタイ人日本語学習者によるナラティブ作文を対象に、項目別の評価と日本語能力との関連を分析し、日本語能力に応じて評価が高くなる項目がある一方、「過不足ない描写」「導入部とまとめ」は日本語能力に関係なく全体的に点数が低く、日本語能力が高い学習者にとっても容易でない項目があることを明らかにしている。

また、1 章で述べたように、坪根他（2021）、影山他（2021）では、日本語の論証型作文と英語のナラティブ作文の評価項目、ナラティブ・ディスコースの構成要素を参考に、ナラティブ作文の評価項目として【内容】【構成】【日本語】という 3 つのトレイトとそれに属する 14 の評価項目を設定した上で、この項目を用いて日本人大学生が書いた 2 種類のナラティブ作文を評価し、good writing について探っている。このうち、影山他（2021）では、各作文の項目毎の評価点を算出し、上位群と下位群の平均点の違いを比較検討している。その結果、2 種類のナラティブ作文で共通して【内容】＜課題達成＞＜メインポイントの明確さ＞＜一貫性＞＜過不足ない描写＞、【構成】＜順序立て＞＜結束性＞＜バランス＞、【日本語】＜正確さ＞と合計点において、上位群は点数が有意に高く、これらの項目ができていることが明らかになった。影山他（2021）では評価項目の合計点が高い作文を上位群としているが、評価項目の重み付けが異なる場合もあることから、総合的な評価で上位群と下位群を分けて分析することが課題となった。

そこで、本稿では、日本語学習者の書いたナラティブ作文について、総合評価で得点の高い作文と低い作文を分けて、それぞれの作文の特徴を明らかにし、日本語教師が評価の際にどのような観点を重視するかについて調査することにした。

3. 調査概要

3.1　調査に用いた作文

調査に用いた作文はタイ、ベトナム、インドネシア、ロシア、スロベニア、ハンガリーの大学の日本語学習者（初級レベル修了以上）が書いた作文である。以下の課題を示し、「忘れられない出来事」というナラティブ作文をタイプして提出してもらった。時間制限は設けず、辞書を使ってもよいことにした。

「忘れられない出来事」 日本の協定校の新聞で、「忘れられない出来事」という特集号を組むことになり、そこに記事を書くように頼まれました。あなたの「忘れられない出来事」についてのエピソードを紹介する文章を 600 字～ 800 字で書いて、送ってください。

どのような特徴を持つ作文が高く評価されるかを探るため、収集された作文の中から内容、構成、日本語にあまり問題がない、いずれかが優れている、やや問題があるなど、特徴の異なる 10 編の作文 A ～ J を筆者らが選び、調査に用いた。

3.2　調査協力者と調査方法

これら 10 編の作文を、日本の大学で留学生の作文指導をしている母語話者日本語教師 20 名に評価してもらった。20 名の日本語教育歴は 10 年から 30 年、平均 20.6 年（標準偏差（*SD*）：5.8）で、全員が初級、中級、上級すべてのレベルを担当した経験がある。留学生の作文指導歴は 3 年から 30 年で、平均は 12.6 年（*SD*：8.0）である。ナラティブ作文の指導経験があると回答したのは 20 名中 14 名である。

調査はメールで行い、日本語教育に関する質問票に回答した後、調査 1、2、3 の順で質問紙に回答してもらった。一つの調査が終了し、次の調査に進んだ後は、元の調査に戻って追加・修正をしないように指示した。

調査 1 では評価者各自の基準に基づき 10 編の作文を 1（かなり問題がある）から 6（非常によい）で総合評価してもらった。調査 2 では各自の基準で、「よい」と思われる順に 1 位から 10 位まで順位付けし、1 位と 2 位、2 位と 3 位のように隣接する二つの作文の順位を決定する際の決め手を自由記述で回答してもらった。調査 3 では、こちらで提示した【内容】【構成】【日本語】のトレイトに属する計 14 項目の中から、ナラティブ作文を評価する際に意識した項目をすべて選択し、提示した項目以外に意識したものがあれば追加してもらった。提示した項目は坪根他（2021）、影山他（2021）で用いた項目である。また、各項目をどの程度重視したかを 1（あまり重視していない）から 4（非常に重視した）で回答してもらった。なお、項目を提示する順番が結果に影響を与えないよう、各トレイト内の項目は五十音順に示した。

3.3　分析手順

分析は、以下の手順で行った。

まず、日本語教師がどのような観点から日本語学習者のナラティブ作文を評価するのか、その中でどのような観点を重視するのかを明らかにする（研究目的 1）ために、評価の際に 14 の評価項目を意識したか、各項目をどの程度重視したかという調査 3 の結果を集計した。

次に、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文はそれぞれどのような特徴の作文かを明らかにする（研究目的 2）ための下準備として、調査 1（1 ～ 6 点の総合評価）の平均点により、評価対象の作文を「上位」「中上位」「中下位」「下位」にレベル分けし、「上位」の作文を good writing と考えて分析することにした。また、このレベル分けが、調査 2 の順位付けの結果と一致するかについても確認した。

続いて、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文はそれぞれどのような特徴の作文かを明らかにする（研究目的 2）ための下準備として、順位付けの決め手に関する自由記述（調査 2 の結果）を切片化して、3 トレイト 14 項目に分類し、その記述が 2 作文のどちらに言及しているか、またそれがプラス評価かマイナス評価かを集計した。

分類の際、切片化した一つの部分に複数の項目が含まれる場合は複数の項目それぞれに分類した。また、「構成がいい」など、どの項目か判断できない場合は、【内容】【構成】【日本語】のトレイトでのみ分類した。調査者が分担して分類作業を行い、それをもう 1 名が確認し、曖昧なものに関しては 4 名で検討して最終決定した。

調査 3 において作文評価の際の重視度の高かった項目が実際に調査 2 の順位付けの決め手として挙げられているかについて、その記述数と記述例を重視度の順に見ていくことにより、日本語教師がどのような観点から日本語学習者のナラティブ作文を評価するのか、その中のどのような観点を重視するのかを明らかにする（研究目的 1）。それと同時に、「上位」「中上位」「中下位」「下位」という作文のレベルによって順位の決め手となる項目とその記述内容に差があるかを見ることにより、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文はそれぞれどのような特徴があるかを明らかにする（研究目的 2）。

4.　調査結果と分析

4.1　評価の際に重視された項目

ここでは、日本語教師がどのような観点から日本語学習者のナラティブ作文を評価するのか、その中でどのような観点を重視するのかを明らかにするために、調査 3 の結果を示す。調査 3 では、【内容】【構成】【日本語】のトレイトに属する計 14 項目の中から、評価時に意識した項目をすべて選択して、それ以外に意識したものがあれば追加し、各項目をどの程度重視したかを答えてもらった。重視度は 1（あまり重視していない）、2（ある程度重視した）、3（重視した）、4（非常に重視した）から選択してもらった。表 1 は評価項目を重視度の平均値の高い順に並べたもの

である。意識しなかった項目は 0 として計算した。

表 1.　日本語母語話者教師によるナラティブ作文評価項目の重視度 [1)]

重視度順位	トレイト	調査 3 で提示した項目	意識した者の割合	重視度平均	重視度	調査 2 の自由記述の分類で用いた項目名
1 位	内容	課題を達成している	90.0	3.35	重視された	課題達成
2 位	内容	主題と出来事の間に一貫性があり、全体の筋が通っている	95.0	3.25		一貫性
3 位	内容	メインポイントが明確である	90.0	3.10		メインポイントの明確さ
4 位	内容	具体的で過不足のない、明確な描写（出来事・感想）がある	85.0	2.90		過不足ない描写
5 位	構成	話の論理的な順序立てがある	90.0	2.75		順序立て
6 位	内容	独創性があり、読み手にとって興味深い	95.0	2.70		興味深さ
7 位	構成	重要でない詳細に分量を割きすぎておらず、全体の記述量のバランスが適切である	90.0	2.50		バランス
8 位	構成	パラグラフとパラグラフ、文と文の結束性があり、つながりがスムーズである	90.0	2.40	ある程度重視された	結束性
9 位	日本語	語彙・表現、文法、構文、表記、句読点等が正確である	90.0	2.35		正確さ
10 位	構成	パラグラフ意識がある	70.0	2.10		段落意識
11 位	内容	読者の理解を助ける導入部と効果的なまとめがある	75.0	2.05		効果的な導入とまとめ
	構成	マクロ構成（導入・本論・まとめ）がある	75.0	2.05		マクロ構成
13 位	日本語	語彙・表現、文法、構文等に豊かさ、多様性がある	80.0	1.90		多様性
14 位	日本語	基本的にスタイルが統一されている（効果を狙っての使用を除く）	70.0	1.60		スタイル

結果、追加項目に関しては、20 名の協力者のうち、3 名以上が共通して新たに追加した項目はなかった。また、表 1 が示すように、提示した 14 項目はどれも協力者の 70% 以上が意識していた。よって、これらのナラティブ作文の評価項目はどれもナラティブ作文を評価する上で必要な観点だと考えられる。

平均値を見ると、3.50 以上の「非常に重視した」と 1.50 未満の「あまり重視していない」はなく、半数の 7 項目が 2.50 以上 3.50 未満の「重視した」、残りの 7 項目が 1.50 以上 2.50 未満の「ある程度重視した」項目という結果である。

2.50 以上 3.50 未満の「重視した」1 ～ 7 位の項目を見ると、1 ～ 4 位＜課題達成＞＜一貫性

＞＜メインポイントの明確さ＞＜過不足のない描写＞と 6 位の＜興味深さ＞が【内容】であり、5、7 位は【構成】の＜順序立て＞＜バランス＞であった。1.50 以上 2.50 未満の「ある程度重視した」項目を見ると、8 位は【構成】＜結束性＞、9 位は【日本語】＜正確さ＞であり、この 2 項目は意識した教師の割合が 90% と、10 ～ 14 位の項目より割合が大きい。また、【日本語】には 3 項目あるが、他の項目は 13、14 位となっている。

以上から、どの項目も 7 割以上の教師に意識されており、ナラティブ作文を評価する上で必要な観点であること、評価項目のうち半数が「重視」され、残りの半数が「ある程度重視」されていること、最も重視されるトレイトは【内容】であることが明らかになった。

4.2　上位、中上位、中下位、下位の作文

ナラティブ作文の good writing とそうでない作文はそれぞれどのような特徴の作文かを明らかにするための下準備として、評価対象の作文をレベル分けした。調査 1 の総合評価と調査 2 の順位付けの平均点を、評価の高い順に表 2 に示す。

表 2.　作文 10 編のレベル分け

作文レベル	順位	調査 1 総合評価 （平均）	調査 2 順位付け （平均）
上位 （調査 1 総合評価 4.50 以上 5.50 未満） good writing	1 位	H（5.15）	H（2.05）
	2 位	C（4.90）	B（2.75）
	3 位	B（4.80）	C（2.85）
	4 位	I（4.70）	I（3.55）
中上位 （3.50 以上 4.50 未満）	5 位	J（3.60）	A（5.75）
	6 位	A（3.55）	J（6.55）
中下位 （2.50 以上 3.50 未満）	7 位	D（3.25）	F（7.10）
	8 位	F（3.10）	D（7.20）
	9 位	E（2.90）	E（7.80）
下位 （1.50 以上 2.50 未満）	10 位	G（2.30）	G（9.40）

調査 1 の総合評価の結果は、H（5.15）が最も高く、C（4.90）、B（4.80）、I（4.70）、J（3.60）、A（3.55）、D（3.25）、F（3.10）、E（2.90）、G（2.30）の順となった[2)]。1（かなり問題がある）から 6（非常によい）で評価してもらったが、平均点によりレベル分けした結果、平均点が 5.50 以上の「非常によい」あるいは 1.50 未満の「かなり問題がある」のレベルに当てはまる作文はなく、今回対象とした 10 編は 1.50 以上 5.50 未満の範囲におさまっていた。そこで、その中の 4.50 以上 5.50 未満の H、C、B、I を「上位」、3.50 以上 4.50 未満の J、A を「中上位」、2.50 以

上 3.50 未満の D、F、E を「中下位」、1.50 以上 2.50 未満の G を「下位」とした。

10 編の作文を独立変数とし、評価得点を従属変数とした一要因の分散分析を行った結果、0.1 %水準で有意であり（F（9,171）＝36.60, p<.001）、その後のライアン法による多重比較では、「上位」の H、C、B、I はそれぞれの間に有意差がなく、それ以外の作文との間には有意差が認められた。よって、この「上位」4 作文を good writing と考えることにした。

さらに、調査 2 で 10 編の作文を「よい」と思う順に 1 位から 10 位まで順位付けしてもらった結果は、H（2.05）、B（2.75）、C（2.85）、I（3.55）、A（5.75）、J（6.55）、F（7.10）、D（7.20）、E（7.80）、G（9.40）の順となった[3)]。調査 1 の結果から「上位」とした 4 作文 H、C、B、I は調査 2 では 2 位と 3 位が入れ替わるが、共通の 4 作文である。調査 1 で「中上位」とした 5 位の作文 J と 6 位の A も、調査 2 では順番が入れ替わるものの、やはり 6 位と 5 位であった。また、調査 1 で「中下位」とした 7 ～ 9 位の作文 D、F、E は調査 2 で 7 位と 8 位の順番が入れ替わるものの、7 ～ 9 位であることに変わりはなく、作文 G は調査 1、2 ともに最下位であった。つまり、調査 1 における評価結果に基づく、「上位」「中上位」「中下位」「下位」のレベル分けは、調査 2 の結果とも整合性があることが確認できた。

以下では、作文 H、C、B、I を「上位」、作文 J、A を「中上位」、作文 D、F、E を「中下位」、作文 G を「下位」とし、このうち他の作文とは有意差のある「上位」4 編を good writing として分析し、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文の特徴を明らかにする。

4.3　評価で重視された項目と順位付けでコメントされた項目

調査 2 では 1 位と 2 位、2 位と 3 位など隣接する作文の順位の決め手を書いてもらったが、ここでは各作文における評価項目ごとのプラス評価の記述数を表 3 に、マイナス評価の記述数を表 4 に示す。グレーの色付け部分は、記述数が 4 つ以上で数が多いとみなしたものである。縦軸の評価項目は調査 3 で重視度が高かった順に並んでいる。項目に分類できず、トレイトでのみ分類した記述の数は各作文 0 か 1 であるため、省略する。また、調査 3 の重視度の平均値が 2.50 以上 3.50 未満の「重視した」項目 1 ～ 7 位と 1.50 以上 2.50 未満の「ある程度重視した」項目 8 ～ 14 位の間に太線が引いてある。横軸は、調査 2 の順位付けで「よい」と評価された順に作文が並び、「上位」、「中上位」、「中下位」、「下位」の間に太線が引いてある。

まず、調査 3 において作文評価の際の重視度の高かった項目が実際に調査 2 の順位付けの決め手として挙げられているかについて、表 3、表 4 を概観する。

一つの作文にプラスの記述が 4 つ以上またはマイナスの記述が 4 つ以上あるものは重視度 1 ～ 10 位までの項目である。プラスの記述は重視度 2 ～ 6 位と 9 位の項目、マイナスの記述は重視度 1 ～ 4 位と 7 ～ 10 位の項目にある。「ある程度重視した」項目の中でも得点の低い 4 項目（11 ～ 14 位）は評価の決め手として記述されることが非常に少ない。

調査 3 では 3 つのトレイトの中で【内容】の重視度が最も高かったが、調査 2 においても、【内容】についてはプラスの記述もマイナスの記述も最も多い。そのうち重視度 3 位の＜メインポイ

ントの明確さ＞は「中下位・下位」のすべての作文（F、D、E、G）にマイナスの記述が多く、4 位の＜過不足ない描写＞は「上位・中上位」のすべての作文（H、B、C、I、A、J）にプラスの記述が多い。

表 3 と表 4 の【構成】の項目を見ると、プラスの記述が多いものは「上位」B の＜順序立て＞のみで、マイナスの記述が多いものも「中上位」J の＜段落意識＞、「中下位」E の＜バランス＞＜段落意識＞、「下位」G の＜結束性＞のみである。重視度 10 位の＜段落意識＞は J と E にマイナスの記述が多かったが、【構成】のそれ以外の項目では、複数の作文で記述が多いものはない。

【日本語】は調査 3 における重視度はそれほど高くないが、9 位の＜正確さ＞は順位付けの決め手として多くの作文で記述されている（表 3、表 4 参照）。4 つ以上の記述が最も多くの作文で見られた項目は、【内容】の＜過不足ない描写＞の 8 作文（H、B、C、I、A、J、D、E）で、【内容】＜メインポイントの明確さ＞の 7 作文（B、I、A、F、D、E、G）と【日本語】＜正確さ＞の 7 作文（B、C、I、A、J、F、D）がそれに続く。＜正確さ＞は、「上位・中上位」は作文によってプラス、マイナスの記述が分かれ、「中下位」はマイナス記述のみとなっている。他の項目に比べると重視度は高くないものの、評価の観点になりやすい項目であることがわかる。

次に、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文はそれぞれどのような特徴があるか

表 3.　順位の決め手　プラスの記述数

作文レベル			上位				中上位		中下位			下位
作文			H	B	C	I	A	J	F	D	E	G
調査 1 の作文順位			1 位	3 位	2 位	4 位	6 位	5 位	8 位	7 位	9 位	10 位
調査 2 の作文順位			1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位	8 位	9 位	10 位
重視度順位	トレイト	項目名	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋
1 位	内容	課題達成	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0
2 位	内容	一貫性	1	4	2	2	0	0	0	2	0	0
3 位	内容	メインポイントの明確さ	0	4	2	2	4	1	2	1	1	0
4 位	内容	過不足ない描写	6	6	6	7	6	4	3	1	1	1
5 位	構成	順序立て	1	5	3	1	3	2	2	0	1	1
6 位	内容	興味深さ	9	7	2	2	4	0	0	1	1	0
7 位	構成	バランス	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
8 位	構成	結束性	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9 位	日本語	正確さ	2	1	4	2	0	4	1	1	0	0
10 位	構成	段落意識	2	1	1	0	0	0	3	0	0	0
11 位	内容	効果的な導入とまとめ	1	1	3	1	1	0	2	0	0	0
	構成	マクロ構成	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
13 位	日本語	多様性	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0
14 位	日本語	スタイル	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0

表 4.　順位の決め手　マイナスの記述数

作文レベル			上位				中上位		中下位			下位
作文			H	B	C	I	A	J	F	D	E	G
調査 1 の作文順位			1 位	3 位	2 位	4 位	6 位	5 位	8 位	7 位	9 位	10 位
調査 2 の作文順位			1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位	8 位	9 位	10 位
重視度順位	トレイト	項目名	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1 位	内容	課題達成	1	0	0	2	0	1	2	4	1	6
2 位	内容	一貫性	0	0	2	0	0	0	4	1	4	6
3 位	内容	メインポイントの明確さ	2	2	2	4	1	0	6	5	5	8
4 位	内容	過不足ない描写	2	2	4	0	2	3	2	8	4	2
5 位	構成	順序立て	0	0	1	0	2	1	2	2	3	1
6 位	内容	興味深さ	0	0	2	1	2	3	2	0	1	0
7 位	構成	バランス	0	2	1	0	1	0	0	0	8	1
8 位	構成	結束性	0	1	0	0	0	0	1	2	3	5
9 位	日本語	正確さ	2	5	2	5	11	2	4	4	2	1
10 位	構成	段落意識	0	0	0	0	0	5	0	0	7	0
11 位	内容	効果的な導入とまとめ	2	1	0	1	1	1	1	1	2	0
	構成	マクロ構成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13 位	日本語	多様性	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0
14 位	日本語	スタイル	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0

を明らかにするために、「上位」「中上位」「中下位」「下位」の作文で順位の決め手となる項目に差があるかを観点に、表 3 と表 4 を概観する。

「上位・中上位」と「中下位・下位」の 2 グループには共通点が多い。前述のように、「上位・中上位」すべての作文に＜過不足ない描写＞のプラス記述が多く、「中下位・下位」すべての作文に＜メインポイントの明確さ＞のマイナスの記述が多い。一つの作文にプラスの記述が 4 つ以上あるのは「上位・中上位」の作文のみで、「中下位・下位」にはない。マイナスの記述は「中下位・下位」に集中しているが、以下のような例外も見られた。まず、＜正確さ＞は「上位・中上位・中下位」に、＜段落意識＞は「中上位・中下位」にマイナスの記述がある。また、＜メインポイント明確さ＞は「中下位・下位」すべての作文にマイナスの記述が多いものの、「上位」の I にもマイナスの記述がある。＜過不足ない描写＞も「中下位」にマイナス記述が多いが、上位の C はプラスとマイナスの両方の記述がある。

「上位」の good writing と「中上位」については、表 3、4 を概観しただけでは大きな差は見られない。この差については、実際の記述例を見て考察することにする。

4.4　項目毎の特徴

以下では、調査 2 において一つの作文にプラスの記述が 4 つ以上またはマイナスの記述が 4 つ以上あった重視度 1 ～ 10 位までの項目について、重視度が高かった順に取り上げる。どのレベルの作文についての記述であるかにも注目し、その記述数や記述例を見ていく。特に重視度 2.50 以上 3.50 未満の「重視した」7 項目の中でも特徴的な＜メインポイントの明確さ＞、＜過不足ない描写＞は詳しく見ることとする。また、重視度 1.50 以上 2.50 未満の「ある程度重視した」項目の中では、特に記述の多かった＜正確さ＞に留意する。

4.4.1　課題達成

重視度 1 位の【内容】＜課題達成＞（3.35）[4] は「中下位」の D に 4 つと「下位」の G に 6 つマイナスの記述がある。例えば、D を 9 位とした協力者 4 は「一つのエピソードについて書いているわけではなく、抽象的な内容になってしまっている」、G を 10 位とした協力者 19 は「主張（忘れられない経験が何か）が不明で課題の条件に合わない」と記述している。この 2 作文以外には決め手として記述がほとんどないものの、調査 3 においてこの項目は重視度が最も高かった。よって、課題を達成しているからといって評価が上がるわけではないが、＜課題達成＞に問題がある場合は good writing にはならず、評価が大きく下がると考えられる。

4.4.2　一貫性

重視度 2 位の【内容】＜一貫性＞（3.25）は「中下位」の F、E に 4 つ、「下位」G に 6 つマイナスの記述がある。F を 8 位とした協力者 5 は「統一感がなく、つらつらと書いているように感じる」、E を 9 位とした協力者 3 は「導入の内容が、家族旅行と関連付けられていない」、G を 10 位とした協力者 3 は「3 段落に分けられているが、話に関連がない」と述べ、低く評価している。なお、プラスの記述は「上位」の B のみ 4 つあるが、そのうち 2 つは＜一貫性＞に問題のある「中下位」の F との比較で言及されているためだと考えられる。その他の作文にはコメントがあまりない。調査 3 において重視度が高かったことを考えると、＜課題達成＞と同様に、＜一貫性＞も問題がない場合には順位の決め手として意識されにくいが、問題がある場合は、評価が大きく下がり、good writing にはならないと考えられる。

4.4.3　メインポイントの明確さ

重視度 3 位の【内容】＜メインポイントの明確さ＞（3.10）は「中下位」の F に 6 つ、D と E に 5 つ、「下位」の G に 8 つマイナス記述があり、「中下位・下位」すべてにマイナスの記述が多いのが特徴的である。ただし、この項目は「上位」の I にもマイナスの記述が 4 つある。プラスの記述は「上位」の B と「中上位」の A に 4 つある。

メインポイントが不明確であれば、総合評価も低くなるのは当然だろうが、I が「上位」となったのはなぜだろうか。「中下位・下位」と「上位」の記述例を比較してみよう。

まず、「中下位」の F、D、E と「下位」の G のコメントだが、F を 8 位とした協力者 9 は「ここからは、ただ出来事を述べているだけだった。F は誕生日は楽しかったのだと思うが、結局何が言いたいのかわからない」、F を 6 位とした協力者 2 は「F は 1 日全部の内容がかかれていて、更に焦点がぼやけている印象だった」と述べている。また、D を 9 位とした協力者 6 は「伝えたいポイントがわからない」、E を 8 位とした協力者 11 は「伝えたいことのポイントがはっきりしない」、G を 9 位とした協力者 20 は「段落間のつながりが示されず、個々の出来事が並列的に並べられているため、ストーリーの焦点がわかりにくく、全体として何が言いたいのかも伝わりにくくなっていると感じた」と述べている。つまり、「中下位・下位」の 4 作文は文章全体として何が言いたいのかわからないという理由で低い評価となっていることがわかる。また、F と G についての記述からは、複数の出来事を羅列するだけで説明が不足していることや、＜結束性＞がないことによってメインポイントが不明確になっていることがわかる。

次に、「上位」の I についての記述を見てみる。協力者 15 は 3 位の J との比較で、「テーマはとても良いのであるが、話の展開で最も重要なはずの運転手の言葉『あなたのような人は誰でも良かったね。』という表現の意味がよくわからなかったので 4 位とした」と述べている。H を 1 位、I を 2 位とした協力者 12 も、同じ箇所を指摘し、「『あなたのような人は誰でも良かったね』という運転手の発話の意味がわからなかった点。感謝について考えるきっかけを生んだ発話であるので、この部分がわからないことがわだかまりとして残った」と記述している。つまり、I の場合、話の展開で重要と思われる一文の意味がわからないというメインポイントの不明確さが指摘されている。実際、I の最後の段落では、以下のように全体として伝えたいことがまとめられており、全体として何が言いたいのかわからない「中下位・下位」の作文とは質が異なる。

> 上記のストーリーを通して、「ありがとう」の 5 文字には、とても魅力的で強いパワーが秘められている。実際、「ありがとう」の言葉をもらうと嬉しくなりますし、他人に「ありがとう」というと幸せが深まる。特に、心が疲れてしまった人に対しても「ありがとう」が一番良い。つまり、「ありがとう」の感謝の言葉は生活で本当に役に立つ。

以上から、メインポイントの不明確さには程度の違いがあり、「中下位・下位」の作文のように、全体として何が言いたいのかわからないというような作文は good writing にはならず、評価が大きく下がると言えるだろう。

4.4.4　過不足ない描写

重視度 4 位は【内容】＜過不足ない描写＞（2.90）で、これは「具体的で過不足のない、明確な描写（出来事・感想）がある」という項目である。調査 2 の自由記述を分類する際は、出来事の具体的な描写についての評価も、出来事に対する心情・評価（自分にとっての意味、感じたこと、考えたこと、学んだことなど）についての評価もこの項目に分類した[5)]。

この項目は「上位・中上位」の 6 作文すべてにプラスの記述が多いという特徴がある。「上位」の C はマイナス記述も 4 つあるが、プラス記述は「上位」の H、B、C に 6 つ、I に 7 つ、「中上位」の A に 6 つ、J に 4 つある。一方、「中下位」の作文 D にはマイナス記述が 8 つ、E には 4 つある。このことから、「上位・中上位」と評価されるには、＜課題達成＞＜一貫性＞＜メインポイントの明確さ＞に問題がないだけでなく、＜過不足ない描写＞も求められると言える。では、「上位」の good writing で期待される＜過不足ない描写＞とはどのようなものだろうか。

「上位」の H、B、C、I のプラス記述の代表的なものは以下のようなものである。H を 2 位とした協力者 15 は「飛行機から見た雲の様子という抽象度の高い内容を表現している事、またそこから自分の人生と結びつけた気づきも述べられている点を評価した」、B を 4 位とした協力者 8 は「中上位」の J と比較して「J は出来事や経験が中心ですが、B の作文は、それだけでなく、その時に自身が考えたことが加わっているところを評価しました」、C を 2 位とした協力者 4 は「回顧の表現が巧みである点、具体的でイメージしやすい文章である」、I を 4 位とした協力者 9 は「出来事を通してのメッセージがあった」と述べている。このように、「上位」の good writing では出来事の描写に加え、心情・評価の描写も評価されている。

ただし、「上位」の C はマイナス評価も 4 つあり、評価が割れる。C を 5 位にした協力者 1 は「一連の出来事をあれこれと書いているせいか、内容が冗長に感じる」、C を 6 位にした協力者 12 は「日本での研修全体が印象に残ったのだとは思うが、もう少し具体的な記述が欲しい」と述べ、一つの出来事に絞って具体的に描写することを期待する教師が＜過不足ない描写＞の問題を指摘しており、そのためか、C の作文をやや低く評価している。

「中上位」を見てみると、A について協力者 15 は「初めて眼鏡をかけた日という、印象的な 1 日をテーマに出来事とそれに伴う自分の心理描写詳しく書けている（原文ママ）」としており、A は「上位」の作文と同様に、出来事だけでなく心情描写もできていることがわかる。一方、J については、「ダナンへの旅行について、時間軸に沿って具体的に描写できているので 3 位とした。ただ。事実の描写はできているが、それに対する自分の意見や、ダナンの旅行から何を得たかという“結論”に当たる内容が薄い（楽しかった、また行きたい、だけでは物足りない。）（原文ママ）」（協力者 15）とある。「上位」の B の記述例として挙げた協力者 8 の記述からもわかるように、J は出来事の具体的な描写はできており、感想も多少は書かれてはいるものの、「上位」作文ほど深い記述がない。「中上位」の中でも心情・評価の描写が評価される作文とそうでない作文があるため、この出来栄えだけが「上位」と「中上位」を分けるものではないが、good writing には出来事の描写に加え、心情・評価も期待されていることが読み取れる。

一方、「中下位」D のマイナス記述を見ると、D を 8 位にした協力者 20 は「忘れられないできごとの内容が具体的に示されず、だれが何をしたのかがわからないまま、筆者のこころの動きだけが示されているため、なぜ筆者がそのように感じたのかが、わからない文章になっている」、D を 9 位とした協力者 6 は「説明が不足していて伝えたいポイントが分かりにくい」と指摘している。E を 10 位とした協力者 15 は「旅行で訪れた Orafu という場所がどんな場所か、文章を読

む限り想像するのが難しかった」としている。ここからは、「中下位」では、出来事やその状況自体の描写が具体的でないという問題もあること、また、説明不足によりメインポイントが不明確になる場合もあることがわかる。

以上から、good writing では、出来事についての具体的な描写と出来事に対する心情・評価の描写の両方が重要であり、どちらか一方しかできていない作文は評価が下がることがわかる。

4.4.5　順序立て

重視度 5 位の【構成】＜順序立て＞（2.75）は、「上位」の作文 B のみプラスの記述が 5 つあり、多かった。例えば、B を 1 位にした協力者 13 は「時系列構成の明確さとエピソードのわかりやすさ」と記述している。＜順序立て＞は調査 3 では重視度が高いほうだが、調査 2 で他の作文について順位の決め手として記述されることは多くなく、実際の評価では他の項目ほど意識されていない可能性がある。

4.4.6　興味深さ

重視度 6 位は【内容】＜興味深さ＞（2.70）である。これは「独創性があり、読み手にとって興味深い」という項目だが、調査 2 の自由記述の分類では特に独創性について言及がない場合も興味深いと解釈できるものを分類した。

この項目はプラスの記述が「上位」の H に 9 つ、B に 7 つ、「中上位」の A に 4 つあった。統計的な有意差は認められていないものの、H は調査 1、2 ともに 1 位、B は調査 1 で 3 位、調査 2 で 2 位の作文である。「上位」の 4 作文のうち 2 作文はプラスの記述が多くないため、今回の調査では「上位」となるために必須とは言えないが、good writing の中でもより高い評価を得るためには、＜興味深さ＞が重要な要素となる可能性がある。

例えば、「上位」の記述例を見ると、B を 1 位とした協力者 9 は「B は心に響いて、揺さぶられた。エピソードとしても強く，書き方も良く、本人の考えにも共感した（原文ママ）」と評価している。また、H を 1 位とした協力者 1 は「所謂『感動ネタ』ではないのに着眼点や観察力が優れている点」を挙げている。

「中上位」の記述例を見ると、協力者 7 は A を 6 位として、7 位の D と比較し、「『忘れられない出来事』という新聞記事として、A のほうが D より面白い。A は初めて眼鏡をかけたときのエピソードを語っているが、D にはエピソードに具体性がなく、新聞記事の読み手としてはおもしろくない」と述べており、具体的で過不足のない、明確な描写（出来事・感想）があること、すなわち＜過不足ない描写＞が＜興味深さ＞につながることが示唆される。

【内容】の中でも＜課題達成＞＜一貫性＞＜メインポイントの明確さ＞＜過不足のない描写＞はどれもマイナスの記述も多くあったが、＜興味深さ＞はマイナスの記述が 4 つ以上ある作文がない。よって、＜興味深さ＞は特に優れている場合に加点されるタイプの項目だと考えられる。本調査では平均点が 5.50 以上となる「非常によい」作文はなく、4.50 以上 5.50 未満の作文を「上

位」として分析したためか、＜興味深さ＞は「上位」作文のための必須要素となっていないが、5.50 以上の「非常によい」という評価のためには必須となる可能性もあるだろう。

4.4.7　バランス

重視度 7 位の【構成】＜バランス＞（2.50）は「重要でない詳細に分量を割きすぎておらず、全体の記述量のバランスが適切である」という項目だが、「中下位」で 9 位の E のみ、マイナスの記述が多く、8 つあった。E を 7 位とした協力者 20 は「このストーリーの中で重要だと思われる『景色』の記述が薄く、それほど重要だと思われない、序論や家族のスケジュールに紙幅の多くが割かれているため、ストーリーの焦点がぼやけ、ストーリーを追いにくいと感じた」と述べ、＜バランス＞の悪さがメインポイントの不明確さにもつながるとしている。実際の評価において＜バランス＞は大きな問題がない場合は他の項目ほど意識されないが、この項目までが重視度 2.50 以上で「重視した」項目であるため、問題がある場合は評価が下がると考えられる。

4.4.8　結束性

調査 3 の重視度 8 ～ 14 位の項目は 1.50 以上 2.50 未満で「ある程度重視した」項目であるため、これらの項目に問題があっても、先の 7 項目ほどは評価に影響が出ないと考えられる。

8 位の【構成】＜結束性＞（2.40）は下位の作文 G のみマイナス記述が多い項目で、5 つ記述があった。G を 9 位とした協力者 20 は「段落間のつながりが示されず、個々の出来事が並列的に並べられているため、ストーリーの焦点がわかりにくく、全体として何が言いたいのかも伝わりにくくなっていると感じた」と述べている（下線部が＜結束性＞で、後半は＜メインポイントの明確さ＞に関する記述である）。この記述からは、＜結束性＞のなさが＜メインポイントの明確さ＞に悪影響を及ぼしていることがわかる。

4.4.9　正確さ

これまでの項目は「中下位・下位」にマイナスの記述が集中していたが、重視度 9 位の【日本語】＜正確さ＞（2.35）のマイナスの記述は、「中下位」の F、D に 4 つあるだけでなく、「中上位」の A に 11、「上位」の B と I にも 5 つある。プラスの記述は「上位」の C と「中上位」J に 4 つあり、「上位・中上位」では作文によってプラスとマイナスが分かれている。どのレベルでも評価の観点となるが、＜結束性＞同様、「ある程度重視した」項目であるため、＜正確さ＞に問題がある場合も、1 ～ 7 位の項目ほどは評価に影響が出ないと考えられる。

＜正確さ＞は「上位」の作文 B と I にもマイナス記述が 5 つあったが、これは隣接する作文との比較によるものであり、B や I がかなり不正確というわけではないようである。B については、C を 1 位、B を 2 位とした協力者 17 が「読み進める際にひっかかる日本語の文法、用法的な間違いの多寡」、C を 2 位、3 位を B とした協力者 6 も「実はそれほど違いがないと思ったが、初級的な間違いが多いほうを低くした」と記述している。比較されることの多かった C はプラス

の記述が多く、協力者 2 が C を 1 位として「間違いが少なく、引っ掛かりなく読めた」と述べているように、正確であることがわかる。I の場合は、重要な箇所の不正確さが目立っているようである。＜メインポイントの明確さ＞でも示したように、協力者 15 が「話の展開で最も重要なはずの運転手の言葉『あなたのような人は誰でも良かったね。』という表現の意味がよくわからなかったので 4 位とした。テーマの理解が文法的な表現ミスで阻害されてしまった」と指摘している。4.4.3 で I の最終段落の文章を載せたが、全体的には日本語がかなり正確で、上記の一箇所の不正確さが問題となっているようである。

「中上位」を見ると、A はマイナス記述が 11 と非常に多く、J はプラス記述が 4 つあった。協力者 6 は J を 7 位、A を 8 位とし、「正しさ。A の方が構成は工夫されていて効果的だが重要な箇所の文法・語彙のミスが多い」と述べている。また、A を 5 位にした協力者 11 は 4 位の C と比較し、「内容は A のほうがいいが、A は初級文法の間違いが多すぎる」としている。確かに、A は最終段落の重要な箇所で「もし眼鏡をかけなければらならくなったら、ハンサムではなくなったり、友達たちに笑われたりすることで判断しないのようにした」となっていて、意味理解に問題が生じている。また、「眼鏡の店がついて眼鏡の店者にあいさつとしておきゃさんここおかけくださいといわれてこの写真を明るくご覧になるかと聞かれた。」というように、その他の部分でも助詞や語彙の間違いや誤記が多く見られ、「上位」でマイナスの記述がされた＜正確さ＞よりも問題が大きいことがわかる。

A の場合、重要な箇所で意味が通じず、その他の部分でも初級の間違いが散見されることから＜正確さ＞について多くの日本語教師がマイナスの記述をしており、総合評価が下がっている。しかし、A は「上位」の作文のように＜過不足ない描写＞の心理描写も評価され、「上位」の一部と同様に＜メインポイントの明確さ＞と＜興味深さ＞のプラス記述が多いことから、「中下位」にまで評価は下がらず、「中上位」となったと考えられる。

＜正確さ＞は、これまで見てきた他の項目とは異なり、「上位・中上位・中下位」でマイナス記述が多く、幅広いレベルで評価の観点となっている。しかし、重視度は 9 位で他の項目ほど高くない。＜正確さ＞の問題だけで「中下位」にまで大きく評価が下がるわけではないが、＜正確さ＞の問題が比較的大きい場合は、【内容】が評価されていても「上位」とはならず、「上位」「中上位」の違いを決定する要素になるようである。

4.4.10　段落意識

重視度 10 位の【構成】＜段落意識＞（2.05）は、段落のない「中上位」の J と「中下位」の E のみ、マイナスの記述が多かった。J を 9 位とした協力者 7 は「J は切れ目なくエピソードが続き、接続詞は使われているものの、改行はないため読みにくい」、E を 9 位とした協力者 17 は「段落もなく、文章がうまく構成されていないため、バランスの悪さを感じる」、E を 7 位とした協力者 20 は「段落のまとまりが改行や、段落冒頭の文字空けで視覚的に示されていないことも、内容を理解しにくくなっているとこも一因と考えられる（原文ママ）」と述べている。

調査 3 の重視度はそれほど高くないものの、やはり段落がないと内容理解がしづらくなり、評価はやや下がるようである。なお、11 ～ 14 位の項目は、順位付けの決め手として記述されることはほとんどなかった。

5. 考察

5.1　評価の観点と重視される観点（研究目的 1）

分析の結果、調査 3 で提示した 3 トレイト 14 項目はすべて、70% 以上の日本語教師が意識しており、評価の観点となることがわかった。評価の際の重視度の平均値が 2.50 以上 3.50 未満の「重視した」項目は以下の 7 項目であり、【内容】の＜課題達成＞＜一貫性＞＜メインポイントの明確さ＞＜過不足のない描写＞、【構成】＜順序立て＞、【内容】＜興味深さ＞、【構成】＜バランス＞という順に重視された。残りの 7 項目は 1.50 以上 2.50 未満の「ある程度重視した」項目だが、8 ～ 10 位の【構成】＜結束性＞、【日本語】＜正確さ＞、【構成】＜段落意識＞は実際の作文評価の際にも順位付けの決め手として記述されることが多かった。つまり、この 3 項目は評価の観点にはなりやすいが、この項目の出来栄えは 1 ～ 7 位の項目ほど評価に大きく影響を与えないと考えられる。重視度 11 ～ 14 位の【内容】＜効果的な導入とまとめ＞、【構成】＜マクロ構成＞、【日本語】＜多様性＞＜スタイル＞は、作文の順位付けの決め手として記述されることも少なく、他の項目ほど重視されていないことがわかった。

トレイト別にまとめると、ナラティブ作文の評価で重視度の高い項目が最も多いトレイトは【内容】である。意見文を対象として評価観点の記述数を調査した伊集院他（2018）でも、評価を決定づけた良い点と悪い点の記述は、「内容」「言語」「構成」「形式」の順に多かったということであるが、意見文同様、ナラティブ作文でも【内容】が最も評価の決め手となりやすいことが明らかとなった。

なお、順位付けの決め手として最も多くの作文で 4 つ以上記述された項目は【内容】＜過不足ない描写＞＜メインポイントの明確さ＞、【日本語】＜正確さ＞である。＜過不足ない描写＞は 6 作文でプラスの記述、3 作文でマイナスの記述が 4 つ以上あり、合計 8 作文（のべ 9 作文）で評価の観点となっている。＜メインポイントの明確さ＞と＜正確さ＞は、どちらも 2 作文でプラス記述、5 作文でマイナス記述が 4 つ以上あり、それぞれ合計 7 作文で評価の観点となっている。つまり、＜過不足ない描写＞＜メインポイントの明確さ＞＜正確さ＞という 3 項目はナラティブ作文の評価の観点となりやすい項目であると言える。

また、田中・坪根（2011）によると、日本語教師は「課題の達成」「主張の明確さ」「内容のオリジナリティ」「客観的で広い視野からのサポート」「構成」「談話展開のテクニック」「表現力の豊かさ」等を論証型作文の good writing の順位決定要素として捉えていたが、今回のナラティブ作文においても【内容】＜課題達成＞＜メインポイントの明確さ＞は特に重視される項目であり、＜興味深さ＞や【構成】も決定要素として記述されることがあった。しかし、今回調査対

象としたナラティブ作文において【日本語】の＜多様性＞に関する記述は少なく、文の意味理解やメインポイントの把握につながる＜正確さ＞に関する記述が目立った。

5.2　ナラティブ作文の good writing とそうでない作文の特徴（研究目的 2）

本調査は 10 編の「忘れられない出来事」という作文のみを対象としたものであり、順位の決め手も隣接する 2 作文についての記述であるため、一般化するにはより多くのデータが必要ではあるが、今回明らかになった主な特徴をまとめると、図 1 のようになる。左の項目が最低限必要な項目であり、それに加え、右の項目ができるほど、よりよい作文だと評価される。

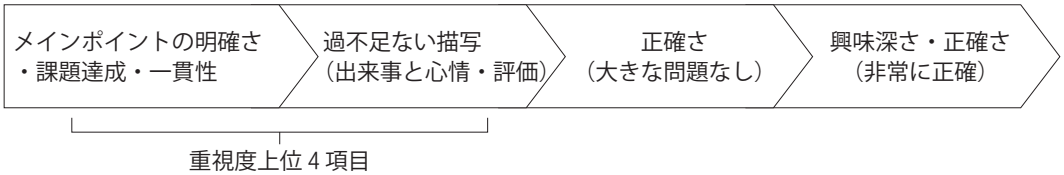

図 1.　good writing に求められること

「中下位・下位」の 4 作文はどれも、【内容】＜メインポイントの明確さ＞に問題が見られ、全体として何が言いたいのかわからないというマイナスの記述があった。それに加え、「下位」の作文 G は【内容】＜課題達成＞＜一貫性＞の両方、「中下位」の作文はそのどちらかにマイナスの記述が多かった。一方、「上位・中上位」の作文は、この 3 項目に大きな問題はなかった。＜メインポイントの明確さ＞＜課題達成＞＜一貫性＞は重視度が最も高い 3 項目であり、「上位・中上位」と評価されるためには、最低限満たす必要のある項目だと言える。

また、「上位・中上位」の 6 作文はどれも重視度 4 位の＜過不足ない描写＞が評価されているのに対し、「中下位」では出来事や状況の描写が具体的でない場合もあった。つまり、「上位・中上位」と評価されるには、＜メインポイントの明確さ＞＜課題達成＞＜一貫性＞に問題がないだけでなく、＜過不足ない描写＞も求められると言える。特に「上位」4 作文は、出来事の描写だけでなく、その出来事に対する心情・評価の描写も評価されており、good writing には出来事と心情・評価の両方が求められることがわかった。

「上位・中上位」の 6 作文には＜正確さ＞についてのプラス記述が多いもの（C、J）とマイナス記述が多いもの（B、I、A）、＜興味深さ＞についてのプラス記述が多いもの（H、B、A）と特にプラスの記述もマイナスの記述も多くないもの（C、I、J）があった。＜過不足ない描写＞の心情・評価の描写が評価された作文（H、B、C、I、A）のうち、＜興味深さ＞は高く評価されていてもいなくても日本語の＜正確さ＞が高いもの（C）と＜正確さ＞の問題がそれほど大きくないもの（H、B、I）は「上位」になった。それに対し、＜興味深さ＞と＜過不足ない描写＞の心情・評価の描写が評価されていても、作文全体で間違いが目立ち、意味のわかりにくい文が複数ある作文（A）は「中上位」となった。このことから、日本語学習者のナラティブ作文にお

いて、＜興味深さ＞が高く評価されなくても＜正確さ＞に大きな問題がない場合は「上位」の good writing となり得るが、＜興味深さ＞が評価されても＜正確さ＞にかなり問題がある場合は good writing とは評価されにくいと言えるだろう。ただし、「上位」の 4 作文のうち調査 1、2 ともに 1 位の H と調査 2 で 2 位の B は＜興味深さ＞も高く評価されていること、今回の調査では作文の総合評価が 5.50 以上 6.00 以下の「非常によい」作文はなかったこと、「上位」の作文の中に＜興味深さ＞と＜正確さ＞の両方が高く評価される作文がなかったことから、good writing の中でも「非常によい」と評価されるためには、＜興味深さ＞と高いレベルでの＜正確さ＞も求められることが示唆される。

本稿で明らかになった good writing の特徴を藤原（2013）と影山他（2021）をふまえて考察すると、共通点が見られる。藤原（2013）では、日本語学習者の物語文の高評価群と低評価群の評価は「事実の説明」「情景描写」「背景説明」に有意差があったという。今回の調査でも、「上位・中上位」の作文は＜過不足ない描写＞が評価されており、そのうち「上位」は出来事だけでなく、それに対する心情・評価の描写ができていることが評価されていた。＜過不足ない描写＞は重視度も高く、ナラティブの good writing を決定する重要な要素であることがわかる。

また、日本人大学生が書いたナラティブ作文について評価項目の合計点が高い作文を上位群として分析した影山他（2021）では、上位群は下位群よりも【内容】＜メインポイントの明確さ＞＜課題達成＞＜一貫性＞＜過不足ない描写＞、【構成】＜順序立て＞＜結束性＞＜バランス＞、【日本語】＜正確さ＞ができていた。各評価項目の重み付けが異なる場合もあることから、今回は項目の合計点による評価ではなく総合的な評価で作文を「上位」「中上位」「中下位」「下位」と分けて分析したが、日本語学習者が書いたナラティブ作文においても、【内容】＜メインポイントの明確さ＞＜課題達成＞＜一貫性＞＜過不足ない描写＞は「中上位・上位」の作文でできていた項目であり、【日本語】のある程度の＜正確さ＞は「上位」と評価されるために必要な要素であった。【構成】については順位づけの決め手として挙がることは少なかったが、「上位」の作文に＜順序立て＞のプラス記述、「下位」の作文に＜結束性＞のマイナス記述、「中下位」の作文に＜バランス＞のマイナス記述が見られた。以上、本調査の good writing の特徴は先行研究の結果と合致する部分が多いことが明らかになった。

最後に、以上の結果をふまえてナラティブ作文が苦手な日本語学習者がよりよい作文を書くためにどうすればよいかを考察する。good writing に近づけるためには図 1 で示したように、まず＜メインポイントの明確さ＞＜課題達成＞＜一貫性＞の問題を解決し、出来事とそれに対する心情・評価について＜過不足のない描写＞をする必要がある。

特に、メインポイントを明確にすることは非常に重要である。メインポイントの不明確さの原因はさまざまであるが、調査 2 の記述からは、複数の出来事を羅列していて＜結束性＞や＜一貫性＞がないこと、必要な説明が不足していて＜過不足ない描写＞や＜バランス＞に問題があることにより、全体として何が言いたいのかわからなくなっていることが示唆された。よって、特に重要な出来事を取り上げ、それについて詳しく説明をし、その出来事に対する心情・評価も書く

ことで、その出来事がどのような意味を持つのかを明確にし、作文全体として伝えたいことをわかりやすくする必要があるだろう。また、作文を書く前に、メインポイントを意識してアウトラインを書き、一貫性をもたせること、段落と段落の関係を示すことも重要である。このようにして、＜メインポイントの明確さ＞についての意識づけを図ることで、ナラティブ作文が苦手な日本語学習者もよりよい作文を書くことができるようになるだろう。

6. おわりに

本稿ではナラティブ作文を評価する上で日本語教師が重視する項目を調査し、good writing と評価されるために必要な項目について分析した。ナラティブ作文では評価の観点として【内容】が特に重視されており、特に、メインポイントが明確であること、課題に沿っていること、主題と出来事の間に一貫性があることが最低限求められることが明らかになった。さらに、good writing と評価されるには、出来事とその出来事に対する心情・評価が具体的に述べられていること、日本語の正確さに大きな問題がないことも求められる。また、これらすべてを満たした上で、興味深さがあり日本語が非常に正確な作文は特に優れたナラティブ作文とみなされることが示唆された。

本稿は日本国内の大学で留学生の作文指導をしている日本語母語話者教師を対象としたが、今後は対象を広げ、海外で教えている日本語教師（母語話者と非母語話者）の評価観点も調査していきたい。今回は順位の決め手を記述してもらってその記述を分析したが、今後は総合評価の他に項目ごとの個別の評価をしてもらって分析することで、good writing の特徴を明らかにしていく必要があるだろう。また、ナラティブ作文を評価するためのフローチャートを作成する場合に、どのような順序で項目を配置していくかについての調査等も今後の課題とする。

注

1）　調査 3 で用いた「パラグラフ」という表現は「段落」に変更した。

2）、3）、4）（　）内の数値は平均値を示している。

5）　調査 3 では＜過不足ない描写＞「具体的で過不足のない、明確な描写（出来事・感想）がある」という項目を提示したが、調査 2 の自由記述からは出来事と心情・評価については個別に評価する必要があると考えられた。そこで、今後の研究では＜出来事の描写＞「出来事について具体的な描写がある」と＜心情・評価＞「出来事に対する心情・評価（自分にとっての意味、感じたこと、考えたこと、学んだことなど）がある」の 2 つに分けることとした。

参考文献

安藤葉子（2018）「大学で必要とされる『書く力』とは」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部

紀要』49、133-143.

伊集院郁子・小森和子・奥切恵（2018）「大学教員によるライティング評価の観点を探る」『Learner Corpus Studies in Asia and the World』3、159-176.

尾関史（2017）「日本語授業としてのライフストーリー活動の可能性 ── 教師と学習者の変化から探る実践の意義 ── 」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第 9 号、1-9.

影山陽子・坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子（2021）「プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い ── 高得点を得た『よいナラティブ』の提示 ── 」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第 13 号、27-35.

数野恵理・影山陽子・坪根由香里・トンプソン美恵子（2021）「日本語学習者が書いたナラティブ作文における good writing ── 日本語母語話者教師は評価時にどのような項目を重視するのか」『日本語教育方法研究会誌』Vol.28 No.1、10-11.

佐藤智照（2019）「ライフストーリー・インタビューを用いた異文化理解教育 ── 留学生と日本人学生の共修授業における実践の報告 ── 」『島根大学外国語教育センタージャーナル』14、23-32.

菅谷奈津恵（2018）「全学教育におけるライティング課題の実施状況：東北大学教員への面接調査から」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第 4 号、463-473.

田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート ── 読み手と構成を考えた日本語ライティング ── 』くろしお出版

田中真理・阿部新・影山陽子・佐々木藍子・坪根由香里（2018）「ヨーロッパ日本語学習者のライティング（エッセイ）分析：総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して」『ヨーロッパ日本語教育』22、75-92.

田中真理・坪根由香里（2011）「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価 ── そのプロセスと決定要因 ── 」『社会言語科学』第 14 巻第 1 号、210-222.

坪根由香里・影山陽子（2020）「ナラティブ作文の評価に関する探索的研究 ── タイ人日本語学習者を対象として ── 」『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究論集』1、46-55.

坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子・影山陽子（2021）「日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価 ── 日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて ── 」『日本語 / 日本語教育研究』12、229-244.

藤原美保（2013）「中上級日本語学習者による日本語物語作文 ── 高評価作文と低評価作文の違い ── 」『2013 CAJLE Annual Conference Proceedings』、45-54.

方正（2017）「中国人日本語学習者の書いた作文に対する評価行動 : プロトコル分析による日本母語話者教師と中国語母語話者教師の比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』66、175-184.

脇田里子（2018）「ルーブリックによるライティング評価とアセスメント」村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子（編）『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版 55-74.

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）19H01274「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（代表者：坪根由香里）の取り組みの一部であり、第 57 回日本語教育方法研究会のポスター発表（数野他 2021）の内容を大幅に加筆修正したものである。

謝辞

本研究のためにご協力くださった日本語学習者と日本語教師の皆様にお礼申し上げます。